
みどりの神様

あさば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みどりの神様

【Nコード】

N5986X

【作者名】

あさば

【あらすじ】

主人公、伊坂航が風邪で休んだ翌日、学校に登校してみると、クラスメイトのある少女が文字通り「様変わり」していた。しかし、どうやら彼女が“そんな風”に見えるのは「自分だけ」らしい。その原因は学校の裏庭ににいるというふしぎな神さまの仕業のようで…。

主人公の一人称視点ですすむ学園＋ファンタジー＋ラブコメディ（

?)
o

プロローグ

——一体、おれの目はどうなっちまったんだ？

1、

暦では九月もなかばにさしかかろうかというころ。

夏期休暇が明けても、しばらくはうだるような暑さが続いたが、雨が降った日を境に、急に気温が右肩下がりになりだした。吹く風も肌寒さを増したようだが、今日は陽の光がぽかぽかとあたたかで、午後からずいぶん過ごしやすくなった。

鼻歌などを歌いながら昼休みのにぎやかな喧噪に包まれた中庭を通り、自販機で買った紙パックの牛乳を手に教室へ戻る。陽気にあてられ、朝から抱えていた憂鬱もすっかり忘れてごきげんになっていたおれは、入り口とある人物と出くわした瞬間、その気分を木端みじんに吹き飛ばされた。

その人物とは、その日おれが教室に入ってきたときから頭を悩まされている原因そのもの。

「ふ、藤崎……」

恐れおののいた声で名を口にすると、彼女——クラスメートの藤崎志帆は小首を傾げた。

「なに？ 伊坂くん」

その怪訝そうな仕草に、おれは慌てて取りつくろう。

「あ。えーと、その。す、すごい量だなと思って。これぜんぶ藤崎が食べるのか？」

これ、とは彼女が腕に抱えた袋だ。売店で買ってきたらしいパンやおにぎり、コーヒー牛乳やヨーグルトが無造作に詰めこまれている。女の子がひとりで食べる量にしては多めだなと目を瞠ったが、藤崎は苦笑して首をふった。

「やだな、違うよ。朝美ちゃ……、西野さんと坂下さんのぶんも頼まれたの」

「そ、そうだよな」

アハハ、と空笑いしながらおれはごまかす。彼女の「態度」はどう考えてもふつうだ。それではやはり、おかしいのはおれなのか？しまりのない引きつった笑顔のまま、おれは教室の扉を開ける。半歩後ろに下がって「お先にどうぞ」と藤崎を促した。

「レディファースト」

「あ……ありがとう」

ぎこちない声で礼を言い、教室へ入っていく小柄な背中を見つめながら、おれは肩を落とした。はああ、と重いため息がおれの口から漏れる。

本当に、なんなんだこの事態は。

高校に上がるまでこれといった病気という病気にも罹らなかったこのおれ、伊坂航が季節外れの風邪いさかわたるごときにやられ、二日間まるまる熱にかされた挙句、三日目にようやく気だるい体を引きずって学校に登校してみれば。

ああ。――一体、おれの目はどうなっちまったんだ？

1、

正午過ぎのあたかな陽射しが教室にさしこんでいる。おれは自分の机の上に腰かけ、牛乳パックを片手にほけっと室内を眺めていた。

昼休み終了の予鈴まであと二十分。

教室の中は、あんがい閑散としている。一年F組の生徒の約半数が体育会系の部活に所属しているため、授業終了の鐘と同時に一気にクラスの人口密度が低くなるのだ。

教室に残っているのは、何が面白いのか、嬌声のような笑い声を上げて雑談に興じている女子のグループがいくつかと、普通にくだらない話で盛り上がっている男子が数人、あとは五時間目の予習に余念がない連中と、静かに己の趣味に没頭している人間がひとりふたり。

おれの視線は無意識に、ある一人の人物の上で止まる。

——藤崎志帆。

前述したが、目下のところおれを悩ませているのが彼女の存在だった。誤解しないでもらいたいのが、恋愛感情やそれに近い好意を抱いているという意味ではない。

藤崎は、暗くはないがかといって目立つ存在でもなく、どう控えめに言っても「ふつう」の女の子だった。とりたてて見映えがいいわけではなく——不細工でもなかったが、成績も並、かといって運動ができるわけでもない。

ひとつ注目すべき点を上げるとしたら、生まれてから一度も染め

たことがないのだろうと思われる髪で、肩まであるそれは、いまだき珍しいぐらい艶のあるきれいな黒い色をしていた。あんなにまっすぐで美しい髪は日本人形ぐらいでしかお目にかかったことがない。ああいうのを、緑の黒髪というのだろう。

だが問題は髪ではない。おれの肩までしかない身長でも、細身の体つきでも、女子高生としては標準的な胸の大きさでもない。問題は、ずばり顔だ。

彼女の顔が一体なぜ——「おかめ」に見えるのだ？

2、

そう、彼女はおかめだ。

比喩ではない。重ねて言うが、比喩ではない。おかめと言えばあれだ。能だが神楽だかで使う『阿亀』の面のことだ。別名『おたふく』ともいう。

おれは今朝、三日ぶりの教室に入るなり我が目を疑った。なにせ、教室のほぼ中央、四五人ほどの女子がかたまっているなかに、おかめがいたのだ。そのときのおれの驚きは筆舌に尽くしがたい。

ほっそりした手足の伸びる長袖の白ブラウスに、校則にぎりぎり違反しない丈の紺のプリーツスカート、赤いラインの入った上履き、と首から下は間違いなくうちの制服を来た女子生徒なのだが、首から上が異常だった。むしろ異次元だった。

そのどこからどう見てもおかめとしか言いようのない顔をした女子を、隣にいた西野（こっちはもちろんふつうの顔）が、なんの不自然さもなく「志帆ちゃん」と呼んだとき、おれはさらに仰天した。そしておかめがごく自然に受け答えをしている有様に、おれはめまいがしそうになった。

——志帆。あれは藤崎志帆なのか、と。

ふらふらと自分の席につき、おれが次に考えたのは、なんの目的があって彼女はそんなふざけたお面をしているのだろう、ということだった。

もしやおれが風邪で寝込んでいる二日の間にクラスではなんらかの取り決めがあり、その罰ゲームか何かでお面をかぶって登校することになったのだろうか。それも大概おかしい考えだが、他に彼

女の顔が「おかめ」に見える理由が思い浮かばなかった。

まさか新種のウイルスが世に誕生したのか。おたふく風邪の超強力版で文字通り顔がおたふくに。んなバカな。しかもその説だと彼女がごくふつうに登校しているのが謎だ。そんなケツタイな病気になるすぐさま隔離病棟に放り込まれてもおかしくない。

おれは藤崎の立つ窓の下に立って、こう呼びかける自分を想像してみた。

——おお、おかめ。キミはなぜおかめなのだ？

アホらしい。何を現実逃避しているんだ、おれは。

「なーに暗い顔してんだー、航？」

思わず嘆息したおれに気づいたのか、近くで仲間たちとバカ騒ぎしていた塚本がなれなれしく腕を首に回してきた。鬱陶しい、とおれは顔をしかめる。

しかし塚本とおれは中学高校と続いた腐れ縁。こいつなら、おれが求める答えをくれるかもしれない。そう思ってさっそく訊いてみた。

「なあ、塚本。彼女、どんな風に見えるよ？」

「あ？ 彼女って？」

回された腕を邪険に外しながら、藤崎だよ、と女子のグループを指さして答える。

返ってきたのは、

「別に。いつもと同じじゃん」

という素っ気ない答え。おれは唸った。

やはりクラスぐるみでおれをかつごうとしているのだろうか。だがそんなことをして、一体どんなメリットがある？

「塚本、おまえの目から見た藤崎の容姿をおれに説明しろ。今すぐ。三文字以内で」

「なんなんだ三文字以内って、それ説明じゃねーよ」

「いいから答えてくれ」

「なんだよ急に。えーそうだな、藤崎か。容貌は悪くねえけどパツとしねえな。体つきも……おれとしてはもう少しこう、凹凸のある体型が好みだし」

「おまえの趣味は聞いてねえよ。三文字で答えろって言っただろ」
「うーん、そうだな。じゃあ、『ふつう』」

本当に三文字で説明しやがったが、それはおれが求めた解ではない。

「いやいやいや、よく見ろよほら。なんかさ、一人だけ他の女子とは違ったように見えないかつ？」

勢い込んで言うと、塚本はしばしおれの顔を眺めて絶句した。

「航、おまえ……」

ぽん、と肩を叩き、芝居がかった仕草で首を振る。

「なんだよ？」

「そりゃあれだ。嬉し恥ずかしトキメキ純情、青春と書いて甘酢っぽいと読む、ズバリ恋ってやつだ」

なんだその枕詞は。だいたい「甘酢っぽい」ってなんだ。甘酸っぱいの間違いだろう。

「いや、別に恋とかじゃなく」

「なーに照れてるんだよう。航くんてばイマドキ硬派ぶって、女なんか興味ないねみたいなスタンスずっとってたくせにー、ついに真実の愛に目覚めたってわけー？」

誰が硬派ぶってるだ。

「だから違うって」

否定したが、隠してもダメだぞコイツうこの照れ屋さん、とにやにや笑いを近づけられ、おれはがっくりと肩を落とした。

もうこいつには何も聞かまい。

他によきアドバイザーはいないかと、机に座ったまま肩越しにふ

り向く。すぐ後ろの席で、周囲の喧騒に関わらずひとり黙々と文庫本を読んでいる男子生徒に目をつけた。クラスでも秀才と評判の安永ながつるである。

「安永。ちょっと聞いていいか？」

これ以上ないほど真剣な声で話しかけると、安永は文庫本から顔を上げた。読書の間だけ掛けている眼鏡が、また嫌味なほどよく似合う男だ。

「……いいけど、何」

「彼女、どう思う」

藤崎を示しつつ、さきほど塚本に訊ねたことをもう一度繰り返す。安永は表情ひとつ動かさずに答えた。

「霊長目ヒト上科のメス」

「いや、そういうことが聞きたいんじゃないんでな」

つつこむと、逆に安永は冷静な声で訊き返してきた。

「伊坂にはどんな風に見えるんだ？」

「おかめ」

間髪入れずに答えた。安永は形のいい眉をひそめる。

「……それ、本人には言わないほうがいいと思うよ」
「だーかーらー」。

「おれは別に藤崎を貶めるつもりで言ってるんじゃないよ」

「別に普段と同じに見えるけど？ 昨日、おとといと変わったところもないし」

「やっぱりそうだな……」

「眼科へ行ったほうがいいんじゃないか？」

おれは唸った。まさに的確なアドバイスだ。

「あー、おれもそんな気がしてきたわ」

安永に礼を言って前に向き直り、おれは今日もう何度目かわからないため息をついた。

「一体どうなってんだよー。目の錯覚か幻覚か、それとも病気が呪いの類か。学校の怪談ってやつかいまどき？」

こんな平和ボケしてるガッコにそんなものがあるなんて聞いたことないが。

我がT高校は、優秀な進学校とまではいかないが、県下の公立校の中ではまずまずの進学率を誇っている。素行不良な問題児、いわゆる不良の類もあまりいないし、基本的に生徒の気風がのんきなためか、校内で大きな問題が起こったこともない。

創立してからの歴史は浅くないらしいから、七不思議ぐらいは探せばあるかもしれないが……。

知らぬ間に声を出して呟いていたら、再び塚本が首をつつこんできた。

「何ぶつくさ言ってるの、航。怪談つか、まじないバナシならうちのガッコにもあるじゃん」

「えっ！ マジで、どんなっ？」

「ほら、旧校舎の裏庭。あそこに大きなクスノキがあるだろ。隣のクラスの女子が噂してたけど、話によると、あれ《守り神の木》なんだとよ」

「……守り神の木だあ？」

いきなりうさんくさい。

「そっ。なんでも精霊サマだか神サマだかがその木に棲みついてて、精魂込めてお祈りすると、一つだけ願いを叶えてくれるんだとよ」

「へえ」

どうして女の子というものは、いつの時代でもおまじないとか占いだとかが大好きな生き物なのだろう。おれだって神や幽霊、霊魂といった超常的なものを全面的に否定しているわけではないが（目に見えないことは『いない』という証明にはならないからだ）、やはりそういう話を唐突に聞くと眉につばをつけたくなる。

だが、願いを叶える神さまの木と藤崎がおかめに見えるおれとでは、どっちがよりマユツバな存在だろうか。

「航くんもお願いしてくればあ？　ふ・じ・さ・きさんと両思いになれるかもよー」

からかうような口ぶりでこちらに身を乗り出す塚本を完全に無視し、おれはしばし思索にふけた。　時計を見、予鈴がなるまでまだ時間があることを確認すると、飲みきった紙パックを潰して立ち上がる。

「お、おお？　うそ、マジで行くのか」

返答のかわりに塚本の頭をはたき、ひとりで教室を出た。

溺れるものは藁をも掴むんだ。

3、

学校の建物は新棟と旧棟の二つに分類され、普段生徒たちが授業を受けるH R教室は新棟と呼ばれる赤いレンガ塀の新しい建物に集中し、それ以外の――例えば科学室や音楽室、美術室といった特別教室は、くすんだ灰色の旧棟に詰め込まれている。

その旧棟と学校の外壁の間にひっそりとあるスペースが、サボリ常習犯たちが称して言う『裏庭』だ。めったに教師たちの近づかないこのあたりは絶好のエスケープスポットで、人気がないのいいことに、ここで隠れて悪さをする生徒も少数だがいるらしい。

踏みつぶされた吸い殻が雑草の合間に落ちているのを見つけ、なんとなく舌打ちしたい気分になった。もちろんおれは煙草は吸わないので、裏庭には寝に来たことがあるだけだ。

庭と呼ぶにはあまりに殺風景な場所なのだが、外壁のそばに背の高い常緑樹が一本だけ生えている。種類までおれは知らなかったが、あれが噂の木なら、「クスノキ」ということになる。空に向かって伸ばされた梢が影を作り、ちょうど屋根のような役割をしてくれるので、その下で寝るのに都合が良いのだ。

――ん？

裏庭にたどり着いたとき、おれはいつもと様子が違うことに気がついた。

誰かが木の下に佇んでいる。今までここで誰かと鉢合わせしたことはなかったので、珍しいなとおれは思う。

先客かと思ったが、どうもおかしい。小柄で華奢な体つきに、ぱっと見、女の子かと思ったが、よくよく眺めると実際は奇妙な身な

りをしたひとりの少年だった。

狩衣——否、水干というのだろうか、写真かドラマの衣装でしか見たことがないような鮮やかな翠緑の着物に濃い緑の袴、下駄を履き、頭には烏帽子まで被っている。

年ごろはおれより二つか三つ下ぐらい。今までに一度も陽の光を浴びたことがないのでと思うほど透き通った白い肌をしており、顔立ちは純和風、切れ長の目元はなんとなく狐を連想させる。狡猾なだけじゃなく、好奇心旺盛な一面もある狐の仔だ。

容姿だけでも充分に驚きだったが、なにより奇っ怪だったのは、その身体が向こうを透かしていたこと。ここまでくればもう、この少年が何者であれ『ふつう』ではありえない。

「まさか、こんな昼間っからゆ、……」

と言いかけて、おれは絶句した。幽霊、と言いたかったのだが、それ以上は言葉が喉につかえて出てこなかった。

幽霊（仮定）少年は声を発したおれをまっすぐに見据え、にやりと笑った。切れ長の目を細めると、ますます狐じみた印象が強くなる。

「やあ。ここで授業を二回ほどエスケープしたところある伊坂航くん」

じりじりと後ずさりかけていたおれはその言葉に反応した。こんなおかしな奴とは関わり合いになりたくなかったのに、思わず疑問を口にしてしまう。

「あ、あんた何者だ？　なんでおれの名まえ知ってんの？」

「いや、だってわたしはこの木に棲んでる守り神だから」

微妙に答えになっていない返事に、おれは目を丸くする。

「守り神？　あんたが、本当に？」

「まあ神っていうか、神さまみたいなものだね。精霊とか木霊とか、まあそのへんのものだと思うってくれていいよ」

「精霊と神ってぜんぜん中身が違わくないか？」

そのへんって《どのへん》だよと内心で疑問に思いつつ、つい口でもつつこんでしまう。いや、もちろんおれは神も精霊も見たことないんだけど。

「あんまり気にしないで。そういう霊的なありがたいものだと思うてもらえれば間違いはないから」

そんないい加減な。

「つまり、なんちゃって守り神？」

「……なんちゃってはちよっと」

「じゃあ、もどき？」

「もどきも勘弁してもらいたいなあ」

「なんだよあんた。意外とわがままなんだな。えーとじゃあ……」
さらに提案を挙げようとすると、神ももどきだか精霊もどきだかはわざとらしい空咳きをコホンとひとつつした。

「あー、ところでひとつ訊いてもいいかい、伊坂航くん。ここに何か用があつて来たんじゃないのかな？ どうやら惰眠をむさぼりに来たわけではなさそうだけど」

指摘されて、おれはようやくここへ来た理由を思い出す。

そうだったそうだった。

「あんたが本当に神さま的なものだったらわかるんじゃないのか。今、おれすごーく困った事態になってんだ」

「そうかい？ どこらへんが？」

「とぼけんなよ。今までおれがここにサボりに来たって姿現さなかったのに、今日に限ってわざわざそうやって出てきたってことは、何か意味があるんだろ」

狐面の彼はほう、と感心したように眉を動かした。

「伊坂くん、きみ、意外と頭の回転は悪くないんだね」
どういう意味だ。腹の立つ。

「ふざけんな。もしかしてクラスの女子がおかしな風に見えるのも、

あんたの仕業なのか？」

聞いたとたん、緑の神さまもどきはしてやったり、という笑みを浮かべた。たくらみが巧くいって喜ぶ、いたずら小僧のような顔だ。「おかしな風に見える？　へえ。どんな風に」

「どんな風って……いいだろ、そんなことは。おれが今訊いてるのは、あんたの仕業なのかどうかってことだ」

「そうとも言えるし、違うとも言える」

生意気な少年の顔でくつくつと笑う。その謎かけのような言葉に、おれは眉をひそめた。

「どういう意味だよ？」

「なぜって、わたしはひとの願いを叶える存在にすぎないからね。きみが今もし奇妙な状況に陥っているなら、それを望んだ者が別にいるってことだ」

「……つまり、『誰か』がおれに対して呪いをかけるようにあんたに頼んだってことか？」

「呪いとは心外だね。別に大して困ってもいないだろ？」
むっとなった。

「あのなあ、あんた！　勝手なこと言うなよ。困ってんだよ、げんに！　おれは！」

「何か不都合でもあるのかい？」

「当たり前だろ！　クラスの女子の顔が『おかめ』に見えるんだぞ。吹き出しそうになって困るんだよ！」

「ふうん、誰の？」

即座に問われ、おれはやや怯んだ。名指しするのに抵抗を覚え、渋々答える。

「……藤崎志帆って子」

「そうか。それは良かった」

「なんだよそれはっ、どういう言い草だ！」

即座におれは嘸み付く。

「てゆーかこの現象自体はあんたの仕業なんだろう？　さっさと直

してくれよ、神さまモドキなんだったら！」

「それはダメ」

「なんでだよ！」

「言っただろう？ きみがそう言ったのは、誰かの願い事が前提としてあるから。わたしはそれを叶えただけ」

「ちょっと待て、どこのどいつかしらねえが、そいつの身勝手な願い事のせいでおれがこんなおかしい目になっちまったって言うのかよ！」

「まあ、神頼みなんて、えてしてエゴイステイックなものだからねえ」

神もどきがエゴイステイックなんて横文字を使うな。

「おれの立場はどうなる！ じゃあ、おれがこの呪いを解いてくれてあんたにお願いしたらどうなるんだよ！」

「どうにもならない。——というか呪いじゃないってば」

「バツ、と彼は手を交差させる。理不尽な台詞に、おれは「なんで！」とさらに声を荒げた。」

「わたしはひとりにつきひとつの願い事を叶える。取り消しや重複願いは禁止。ひとつの願いに対して、後から別の人間の願い事がぶつかったときは最初にされたほうを優先する」

「早いもの勝ちかよ！」

「まあ運が悪かったと思って諦めるんだね」

諦めきれるかー！

そう怒鳴り返そうとしたが、おれはハタと別のことを思いついて考え込んだ。

「……願い事ってなんでもか？」

にやりと——それこそ先ほどのこいつのような狡猾な笑みを浮かべておれは訊ねた。彼は眉を寄せておれを睨む。

「きみ、何か物騒なこと考えてない？ 言っとくけど、許容範囲ってのがあるからね。まず殺人と死者の復活は絶対ダメだよ。もちろ

んけがを負わせたり、その逆で人間が自然に持つ治癒力を超えた治療もだめ。あと一億円下さいとか、知能指数二〇〇にして下さいとかも当然ムリ」

なんだ、とおれはあからさまに肩を落とした。

願い事を叶えるシチュエーションには古今東西どの前例を見ても、何かしら条件や制限があるものだが、やはりこいつも例に漏れずということか。

「モテる男になりたーい、とか」

「自分で努力しなよ」

「一流大学に楽して入れますようにー、とか」

「裏口入学は厳禁。法にふれるような真似はしないの」

「憧れの先輩をアタシの虜にして下さーい、とかは」

「ダメに決まってるでしょ、ひとの心を操るなんて。告白するときに勇気が出せるように、とか恋の応援ぐらいはしてあげるけどね」

「なんだよ、それじゃ、ほとんど大したことはできないんだな。…それでも神さまかよ」

「神さまじゃないって。きみ、自分で言ったじゃないか。神さまモドキって」

おれは唸った。

「おれへの仕打ちは法にふれるような真似じゃねえのかよ！」

「ふれないでしょ、別に。法には」

「ぎゃふん」

おれは頭を抱えた。まったくその通りである。

「ひでえ。おれの人権はどうなる」

「若者の特権だよねえ。思い悩むってのは」

だめだ。こいつとは話が通じない。ついにその場にうずくまったおれにトドメを刺すように、校内のどこからか間延びしたチャイムの音が聞こえてきた。ちくしょう、予鈴だ。

「戻るのかい？」

「本当はさぼりたい気分だけだな。あんたがここにいるんじゃない、そ

んな気にもなれねー」

精いっぱいの皮肉をこめて言うと、彼は「そりゃ残念」とちっとも悪びれていない顔でにやにや笑った。

悪態をつきながらその顔に背を向け、教室に向かって歩き出す。ふと気にかかって、おれは二歩進んだところで足を止め、くると振り向いた。

「――なあ、あんた、名前は？」

狐面の神さまもどきはちよつと驚いたような表情になったが、すぐに口元を綻ばせた。そして、その唇が綴ったのは、きれいな一音節だった。

「リュウ」

4、

——リュウ。

字は「流」と書くのだろうか。それとも緑一色リユーイッソクの「リュウ」か。全身緑色だもんな。

などとおれは窓際よりの席でしょうもない思考に耽っていた。

腹がくちた状態の、五時間目の授業はただでさえ眠りに誘われやすい。睡魔がおいでおいでと招き寄せるようにその手をふっているようだ。

おれは思考を打ち切り、生あくびをかみ殺した。

いつも出席番号順に指名する担任の授業なので、自分には関係ない、中には堂々と腕を枕にして眠っている生徒——塚本だ——もいる。教室やや窓側よりの、前から二列目の席で堂のいったことだ。

教壇に立つ担任の水池先生は、教師になってまだ五年も経っていない若い女性だから、どうしても生徒になめられている節がある。授業中めったに怒ることもないし。

そう思うおれ自身も、机に頬杖をついた状態で、落っこちそうなまぶたと必死に戦っていた。寝つきの悪い体質であるのに、昼の教室でこうも眠気に襲われるのが不思議だが、黒板に書かれた古文を追う気力はどうしても湧かない。

水池先生には悪いが、かったるくて仕方ない。

再びあくびをかみ殺し、教室を見回した。どいつもこいつも眠そうな顔だ。おれの目はしばし周囲を泳いだ後、無意識に二列はさんなでななめ後ろの藤崎の席に移り——、

瞬間、おれは「ぶっ」と盛大に吹き出した。

慌てて口元を押さえたおれに、周囲の奇異の視線が集まる。まずい、と慌てたおれは机に突っ伏し、ごまかすように激しく咳き込んだ。

突然のおれの奇行に教室内がざわめき、なんだなんだと興味が集中するのがわかる。

「ど、どうしたの、伊坂くん？ 何かおかしいところでもあった？」
先生が訊ねるも答えられず、おれはただぶんぶんと首をふった。
羞恥心で顔から火が出そうだ。

もはや眠気は完全にどこかへ吹き飛んだ。驚きで跳ね上がった心拍を必死で宥め、ようやく落ち着いたおれは目元に涙を浮かべながら言った。

「す、すみません。つばが気管に入ってしまった」

咄嗟にひねり出した言い訳だったが、なんとか納得してもらえたようだ。教室内のざわめきは徐々に収まり、白けた余韻を残して元の空気に戻った。

担任が黒板に向き直ったところで、おれはようやく胸を撫で下ろす。

そしてこっそりと、ななめ右後ろの藤崎の顔を確認した。……やっぱり、見間違いないじゃなかった。

今度は『ナマハゲ』か、オイ。

5、

放課後。

一日の終了を告げる鐘の音が鳴ったと同時に、おれはとるもとりあえず裏庭に向かった。同じ音楽室清掃班の当番に「オイこら伊坂！」と呼ばれたような気もするが、おれにとっちゃカツラ頭のモーツァルトよりナマハゲが問題だ。

校門へ向かう生徒の流れに逆らって、放課後も相変わらず人気のない裏庭にやって来るなりおれは絶叫した。

「こらてめ『リュウ』——！ おまえの仕業かーッ！」

おれの来訪は予測済みだったに違いない。クスノキの枝に危なげなく腰かけた半透明の少年はくすくすと笑いながらこちらを見下ろした。

「いらっしやい。来てそうそう騒々しい伊坂航くん。なんの用だい」
「何を白々しいっ、今度は藤崎の顔が『なまはげ』になっちまったぞ！ おまえの仕業だろっ！」

「あはは、気に入ってくれたかい？ バリエーションを増やしてみただけど」

「増やすなッ！ そして神さまモドキがばりえーしょんとか言うなっ」

「知らないのかい？ いまや国際化の時代なんだよ。神さまも」

「いっそのことエスプレント語で話してみやがれっ！ 神さまじゃねえっつつたじゃねーかっ」

「うるさいなあ、もう。おかめが気に入らないのかと思って出血大サービスでなまはげにしてあげたのに」

「なまはげが気に入るか！ おれが高校生じゃなかったら泣いてる

ぞ今ごろっ」

「お気に召さないか、残念だねえ。わかったよ、えーとじゃあ……」
「もう考えんなーっ！」

ぜえぜえと肩で息をしながら、おれはその場にしゃがみ込む。恨みをこめた上目遣いでリュウを睨んだ。

「楽しいですかー？　いたいけな青少年をからかって遊ぶのはー」
「はて、いたいけな青少年ってのはドコにいるんだい？」
と嘯き、リュウはにこりと笑った。

「実に楽しいよ。長いこと生きてると娯楽が少なくてね。無償で願いを叶えてるんだからこのぐらゐの福利厚生があっても良いとは思わないかい？」

思わねえよ、と即座に切り返す。ごつごつした根っこをよけて地面の上に座りなおすと、リュウは音も立てずに隣に降り立った。

その体重を感じさせない動きに、改めて人間ではないのだと感じさせられる。

「だいたい無償で願いを叶えるって、あんたが好きでやってることなんじゃねえのか」

リュウはさあね、と肩をすくめる。いちいち芝居がかったやつだな、ホントに。

「だいたいあんた、どうして学校（こうこう）に？」

「わたしは――というか、わたしの依り代であるこのクスノキはもともこの土地に在ったんだよ。学校のほうが後からできたのさ。別にわたし自身はこの土地から去っても良かったんだけど、なんとなく離れがたい気もしてね。新しい子供たちがどんどんこの学校に入ってきて、勉学に励み、笑ったり泣いたりしながら日々を送り、みごと成長して巣立っていくのを見るのは楽しかったし。そんな彼らにときどきちょっかいを出すのもね。まあ、ぶっちゃけると単なる退屈しのぎなんだけど」

「オイ」

ぶっちゃけすぎだ。

「自然界に在るものは時間を経て霊性を帯びるようになるんだ。その時間が長ければ長いほどね。その中でもわたしのように人間に近い思考や姿形をとるものは少なくないけど、積極的に関わろうとするものはあまりいない。良くも悪くもバランスを崩してしまうからね。霊性側も人間側も。昔はその二つも近い存在だったものだけど、今は、ね……」

その淡々とした口調が気にかかって見上げると、リュウの顔からは少年らしい快活さが薄れ、かわって大人びた落ち着きが表れていた。身なりはただの好奇心旺盛な少年なのに、その内側にはたしかに大樹の根のようにどっしりとした剛さがある、とおれは思った。

ふうっと息を吐いて、リュウが依り代にしている木の幹に背を預けた。ごつごつした感触がしつかりと受け止めてくれる。そのことがなぜか、胸につかえた。

「……じゃあ、なんでリュウは関わろうと思ったんだ？」

「その答えは単純さ。『好きだから』だよ」

くすりと小さく笑う。

「人間が？」

「そう、人間が。見ていて全然飽きないからね」

「ふーん、なるほど。変わり者の神さま……神さまもどきなのか」

「わざわざ言い直さなくてもいいよ」

風が吹き、さやさやと葉ずれの音が鳴る。眠気を誘うような、心地のいい音だ。今ごろ校舎の中ではおれ以外の生徒たちがほこりを巻き上げながら掃除に励んでいるのだろうが、ここはそんな喧騒からも遠い。

「――で、いつになったらおれのこの状態を治してくれるんだ？」

リュウは小首を愛らしく傾け、絶望的な返答を口にした。

「さあ、それは願い事をした人間ときみ次第だと思うよ」

「そいつが誰なのか教えてくれる気ない？」

「悪いけど、依頼者のプライバシーを尊重して黙秘させてもらうよ」
「おれの日常は尊重してもらえないのか？」

つつこんだが、無常にも黙殺された。こんちくしょう。

「……じゃあ、せめて『ナマハゲ』をどうにかしてもらえない？」
せいいっぱいの譲歩を口にしたおれを見下ろし、リュウはにやりと笑った。

「飽きたら変えるよ」

6、

あつというまに九月が終わり、十月最初の行事である衣替えが終わると、校内はいよいよ年に一度のお祭りのためにばたばたと慌ただしくなる。

第二週の木・金・土の三日間行われるT高校文化祭のためだ。

うちの文化祭は、一年生がタイル画や立体模型などの自由展示、二年が演劇発表、三年が合唱または舞台パフォーマンス、と学年ごとにはっきり役割が分けられているため、みんな結構真剣に取り組む。来年度は違う分野での発表になるからだ。失敗してもその教訓を生かして次回に励む、ということができないため、基本的に一球入魂の精神を必要とさせられるわけだ。まあ、そんな偉そうなこと言ってるおれも、高校の文化祭は今回がはじめてなんだが。

おれの属する一年F組は、『都市建造物の変容』をテーマに選んだ、らしい。らしい、というのも、詳しいことはおれがちょうど欠席していた二日にはぼ決められてしまっていて、おれは誰がどういった理由でこのテーマを掲げ、クラスメート達が賛同したのかもよく知らないのだ。一年の他のクラスも、聞くところによるとだいたいい似たようなテーマらしいが。

おれはがやがやとした喧騒の中で、ひたすらトンテンカン、と木材に釘を打ち付けた。

放課後の教室には制作途中の凌雲閣や東京タワーといった建物の模型がごろごろと転がって、木屑や発砲スチロールの欠片で足の踏み場もない。資材や設計図を抱えた人間が行き交い、慌ただしく教室を出て行く。ときおり、やれ画材が足りないだの大きさが違うだの寸法を間違えただのの悲鳴があちこちで上がる。

何らかのクラブ活動に所属している人間はそちらとのかけもちになるため、クラス制作はほとんど帰宅部の生徒を中心に進められる。おれや、隣で袖を肘までまくりあげ、ドカタの兄ちゃんよろしく発泡スチロールをぎこぎこ切ってる塚本もそうだ。

「あーだりー。なんでこんなことしなくちゃなんねーんだよ」

のこぎりを持つ手を止め、奴は言っても詮のないことをしきりにこぼしている。

「うるさいな。黙って手を動かせ」

「動かしてるっつーの。あーあ、おれなんで模型作りやらされてんだろ。こっち、男しかないもんなあ。ポスター描きやレポート制作なら女の子と一緒に働けんのにい」

たしかに帰宅部の人間にとって、こういった学校イベントは異性とお近づきになるめったにない機会だ。まあ、おれも平均的な男子高校生程度には異性に興味があるし、残念だと思わなくもないけど。

ふと思いついて見回せば、教室には仲の良い友人たちと混じって藤崎志帆の姿があった。

たしか藤崎は手芸部に所属していたはずだが、そちらの作業（文芸系クラブはほとんどが自作品の展示である）は手が足りていない。ここ数日はもっぱらクラス制作を手伝っている。

おれが藤崎のおかめ顔に驚いてからすでに半月が経過していたが、やや語弊のある言い方をすると、一向に彼女の顔は元に戻らなかった。というよりころころと様変わりを見せた。リュウの「飽きたら変える」の言葉どおりだ。

そんなわけで、三日前から彼女の顔は『般若』だった。離れたところから見てもかなり怖い。

あのパチモン神さまは唐突に変化する藤崎の顔に、おれがびっくりして悲鳴を上げるのを面白がっているのだろう。

あんにやろう、ひとをなんだと思ってやがる、と胸中で罵りながら作業していると、トンカチで左手の親指を打ちつけてしまった。

思わずぎゃつと声を上げて道具を放り出す。

脳裏に腹を抱えて笑い転げるリュウの姿が浮かんだ。待てよ、まさかこれもある一つの仕業じゃないだろうな。

「おいおい航、何やってんだ」

「痛えよ。うるさいな」

おれは渋面で赤くなつた指を舐めた。自慢ではないが、おれはこういった工作系は全般的に苦手だ。男がみんな日曜大工が得意だと思つたら大間違いである。

くそ、おれも模型作り以外の仕事に立候補すりゃ良かった。

毒づきつつ、放り出したトンカチを拾い上げたおれの前に、誰かが屈んだ。

「大丈夫？ 手伝うよ」

驚いたことに、藤崎だった。

おれは彼女の顔を直視しないよう慌ててうつむき、どうも、と小さく礼の言葉を呟く。正直、間近で見る般若の面は相当怖かった。せめて『翁』ならなごめたものを。あのエセ守り神め。

「ここを押さえてたらいいい？」

「ええと、はい。お、お願いします」

「釘はこれ？」

「いや、そっちの短いやつ……」

手伝ってくれているのに、おれは下を向いたままボソボソと答えることしかできなかった。照れているわけではなく、ただ単に恐ろしくて顔が上げられないのだが、これではまるでじめて女の子を意識した思春期まっさかりの中学生ではないか。

まさにそんな風に勘違いしたらしい隣の塚本がにやにや笑いを浮かべながら、

「いいなあ、航くん。藤崎さんに手を貸してもらっしやってー」
などとほざいた。道具一式を抱え、そそくさと立ち上がる。

「おれも誰か手伝ってくれる子探してくるわー」

なんだそのわざとらしい台詞は。あとは若い人同士でホホホごゆつくり、と席を立つお見合い仲介役のおぼちゃんかオマエは。

「というかむしろ置き去りにしないでくれ。般若と二人きりはいくらなんでも気まずすぎる。塚本が去り、内心でおろおろしているといきなり名を呼ばれた。」

「……伊坂くん」

「うわ、はいっ？」

情けないことに、動揺して声の上擦る。どうしたものか。

「手が止まってるよ」

「ハイ。すみません」

仕方なしに藤崎の手元に視線を集中させ、作業に没頭することにした。手元手元、と頭の中で呪文のように繰り返す。幸い藤崎の手は白魚のとまではいけないが、白くて小さくて好ましかった。不自然に長くのばしたり、ニスを塗ったりしていない健康的な桜色の爪も素朴でかわいい。なかなかそそる手だ。

おっといかん、邪念が。集中集中、没頭没頭。トンテンカン。

目の前に 般若いるけど 気にするな（五七五）。

「……それにしてもほっそい指だなあ」

「え？」

ぽつりと呟くと、驚いたような藤崎の声。

——しまった。作業に打ち込みすぎて思考が口からだだ漏れた。

「あ、いや。ほっそりした指だなあとって。ほらおれ、節くれたった指してるだろ？ 全然違うからさ」

ごまかすために、おれは不自然にまくしたてた。焦る焦る、この期に及んでも目線が上げられない。なんかないか話題、会話が弾むようなもの。ほらほらあれだ、落ち着けおれ。えーとえーと。

あ。あった、会話の糸口。

「藤崎って手芸部だったよな。手芸部は、展示だったけ？」

「え、うん。そう。自分の作品の展示」

応えてくれてほっとした。よかった、この話題の移行ならそんなに不自然じゃない。

「編み物とか？」

「うん。編み物だけじゃなくて、パッチワーク縫ったりとか、小物作ったりとかもしてるよ」

「へえ。藤崎ってもしかして器用？」

「別にそんなことないよ。よく針で指さすし。あ、でもあみぐるみは得意かな」

こうして聞いてると、藤崎の声って悪くないな。おれはきゃんきやんした女の煩い声が苦手なのだが、藤崎のは高くなく低くもなく、耳にちょうどいい。もっと聞きたくなったので、おれは無知を晒すことにした。

「あみぐるみって何？」

「知らない？ 毛糸を編んで作るぬいぐるみのこと。編んで作るぬいぐるみだから、あみぐるみ」

「へえ。おれ、編み物っていったらマフラーとかセーターだとかしか思いつかないわ。どうやって作るんだ？」

藤崎はこま編みだのくさり編みだの、立ち上がりのあるなしだの、かぎ針をくぐらせて引っかけけるだの、ときおり手を動かして説明してくれたが、生来不器用なおれにはなんのことやらサッパリだった。だけど不思議とつまらなくはなかった。まったく興味の無い、理解の難しい話だったというのに。一生懸命、自分の好きなことを話す藤崎の様子は好感が持てた。

いい子だな、と素直に思った。

ああ、——これで顔が般若でさえなければなあ。

7、

それからしばらく経って、おれは自然と藤崎を目で探すようになった自分に気がついた。

女友達とのたあいな会話^かを耳で拾い、話すときの仕草に注目し、反応を眺め、笑い方を聞き、声に応え……。

意外とよく笑うことを知ったし、手芸のほかに囲碁が趣味であることを聞いたし（渋い趣味だ）、しっかりしているように見えて鈍くさいところもあることが分かったし、苦手な先生と話すときに落ち着かない様子で手の甲をさすっていることにも気づいた。

本当の表情^{かお}が分からなくなったぶん、そういうところから藤崎の心の機微を読み取ろうと努力したのだ。

だが、はて。この状況は、一体どうなのだろう。



「いいことじゃないか」

しゃあしゃあとリュウは言う。

どこがいいんだよ、とおれは額を押さえた。

「あんたのせいで首から下の反応に注目するようになったんだぞ。本来なら、相手の目を見て話すのがマナーってもんだろが」

「まあ、礼儀上はね」

細い枝に腰かけ、無礼千万なことにあくびをしながら肯くリュウ。最近、ひまを見つけては裏庭に来て、こいつ相手に愚痴を言うのが習慣になりつつある。

「あのなあ。藤崎と話するときだけ視線を合わせられないなんて不自然以外の何ものでもないだろ。おかげで塚本や他のやつらにもあらぬ疑いを抱かれるようになってしまった」

「あながち疑いでもないんじゃないかい」

またぬけぬけと。

「だって、現に彼女のことを気にかかってしょうがないわけだろう？」

「そりゃ気にもかかるわ。あんだけこころ容貌が変わりゃな。最近、だんだん藤崎の元の顔がどんなだったか思い出せなくなってきたるんだぞ。どうしてくれる」

「でもきみが注視してるのは外見^{かお}じゃないじゃないか。言葉や動作、性格や雰囲気なんだろう？」

うっと詰まってしまった。

「彼女の顔が別のものになる、いったんそういうものだとな慣れてしまえば気にも留めなくなるよ。でもそうじゃないんだろう？ 表情がわからないから顔以外のところで心を推し量ろうとする、それは彼女への気遣いに他ならないんだし。違うかい？」

「……まあ、そうだけど」

おれは渋々認めた。

たしかにリュウの言うことにも一理あるが、なんとなくうまく丸め込まれそうになっているような……気のせいかな？

「なあ、ところでひとつ聞いてもいいかい？」

「何かな」

「もしかして、おれがここに居る間、あんた何かやってる？　ここで、おれの他に全然人を見かけないんだけど」

サボリ魔たちの隠れスポットとはいえ、まったく人が近づかないわけでもないだろう。誰とも鉢合わせしないのは少し不自然だ。そう思って訊ねると、リュウはにやりと笑った。

「してるよ。簡単な人払いの術をね」

やっぱり。

「わたしはふつう、人間には見えないからね。人払いをしてないときみ、独りでぶつぶつ木に向かって喋ったり怒鳴ったりしてる怪しい奴になるよ。ま、わたしはそれでも全然かまわないけど」

「待て」

おれはかまうぞ。これ以上おかしい人間になってたまるか。

「それってわざわざ人払いをしてまでおれと話がしたいってことか？」

「おやおや、どういう返事を期待してるのかな青二才の伊坂航くん。わたしはね、別にきみの愚痴を聞きたいわけじゃないんだよ。ひまでひまでしょうがないから耳を貸してあげてるだけで」

「なんだよその言い草は。原因はそもそも誰にあるのかわかってんのか葉緑体」

「誰が光合成を行う細胞内組織だって？ まあ、愚痴ぐらいサービ
スで聞いてあげないでもないよ。意外とイロコイには鈍い伊坂航く
ん」

ほっとけよ。

「口の減らないエセ神さまだな。寂しいなら寂しいって言えばいい
だろ」

「ハテ、一体なんのことやらわからないね自惚れ屋の伊坂航くん。
ところでそろそろ文化祭の準備に戻らなくていいのかい」

「話そらすな」

「あ。人払い解いたから誰か来た」

「なに——！？ あっ、こらてめっ、消えんなリュウ！」

祭を数日後に控えた、平和な午後のことである。

——しかし悲しいかな、平穏は長くは続かないのが世の常という
もの。

おれが藤崎から呼び出しを受けたのは、いよいよ祭を翌日に控えた
帰り際のことだった。

「伊坂くん」

下駄ばこの前で汚いスニーカーに足をつっこんでいたおれは、話しかけてきた人物を見て危うく吹きだしそうになった。おいおい、朝見たときともう変わってるぞ。今度は縁日の屋台で一度は目にする類のもの。変身ベルトでもあれば完璧だ。

いかげん慣れたつもりだったが、久々に強烈だった。チビッコが大好きなヒーローものなんてよく知ってるな、リュウ。イイ趣味してるじゃないか。

おれが心の中で必死に笑いをこらえていると、藤崎はやや上目遣いにおれを睨んだ。

「……ちよつと、いい？」

心なしか声が低い。怒っている？ ……いや、どちらかというと思いつめたような感じだ。

「な、なに？」

動揺しつつ、引きつり顔で問い返した。視線を微妙に藤崎の肩のあたりに逸らしたことは勘弁して頂きたい。この状況下でヒーローもののお面と真正面から向き合う勇氣はおれにはない。

「あのね……」

言いよどむ藤崎。

おれの視線はお腹のあたりで祈るように重ねられた彼女の白い手に移る。わずかに震えているように見えるのは気のせいだろうか。はりつめた緊張を、おれはそこから読み取った。

なんだかただ事じゃない。どうしたらいいんだ。自慢じゃないが、おれはこういう事態には慣れていない。

逡巡するようなしばしの沈黙の後、彼女は吹っ切った様子でこう言った。きっぱりと。

「話が、あるの」

ここじゃ言いにくいから、と歩き出した藤崎のすぐ後ろをぎくしゃくした足どりで追いながら、おれは混乱の極みにいた。気をぬけば右手と右足が同時に出てしまいそうだ。表面だけはなんとか平然を装ってはいたが、頭の中では藤崎の「話があるの」という言葉がひたすらぐるぐると駆け回っている。

話があるの話があるの話があるの話が話がはなしはなしはなしハハハハ、とりあえず落ち着けおれ、とこんな感じだ。

そのリズムに合わせ、心臓も激しく跳ねている。むしろ踊っている。十六年生きてきて、これほど心臓がうるさかったことはない。ぱかっと口を開けば、そこからバクバクと外に鼓動が漏れるのではないかと思うほどだ。

異性から急に呼び出しをうけて動揺しない男子高校生がこの世にしようか。いや、いまい。たぶん。きつと。

動揺と混乱と羞恥と緊張と、あとそれからほんのわずかの期待。これらの感情を全部一緒に混ぜて溶かしてスパイスをふりかけてみたら、あるひとつの単語ができ上がるような気がする。それを言葉にするのはちょっと恥ずかしい。おれはごくりと喉を鳴らし、慌ててバカな考えを打ち切った。

先導する藤崎が最終的に足を止めたのは、なんと『裏庭』だった。よりにもよってこの場所とは。

しかし、視界にでんとそびえるクスノキのそばに、リュウの姿はなかった。

いつもおれが慌てふためく様子を面白がっている奴も、さすがにこの状況で無粋なまねをするつもりはないのだろうか。それとも姿

を隠しているだけで、どこからかこっそりおれ達を眺めてにやついているのだろうか。――絶対、後者だ。賭けてもいい。

「ごめんね、こんな処まで引っぱってきて」

「い、いや」

ふり返り、謝罪する藤崎。おれはまたしても目線をあわさぬよう、斜め下の地面を凝視する。情けないと思うが、こんな場合だからこそよけいに顔が見られない。必死になって足元の石ころを数え始めた。

なかば意地になってうつむくおれに、藤崎もふっと口を閉ざし、あたりには気まずい沈黙が落ちる。

一秒一秒が、果てしなく長く感じる。このときのおれには、永遠よりも長かった。

時間は相対的なものだどこかの偉い人が言っていた。誰だろう思い出せない、ほらあれだ、下をベロンと出してた人だ。イアンシユタインだったかな。とりあえずそういうことにしておこう。

イアンシユタイン博士、あんたは正しい。おれは今身を持ってそのことを実感した。だから責任とってこの状況をなんとかしてくれ。いやいや待て待て、こういう困ったときこそ神頼みではないか。えーと、どっかで見てるクスノキの神、なんでもいいからさっさとこの――、

「――あのね、伊坂くん」

「は、はいっ」

無常にもおれが神頼みを終える前に沈黙は破られてしまった。心の準備もまだだった。

待ってくれと叫びたかった。しかし藤崎は決然と、あるいは容赦なく、その言葉をおれに向けて放ったのだ。

「わたし、伊坂くんに嫌われるようなこと何かした？」

すでに絶頂を迎える寸前だったおれの心臓は、そのとき掛け値なしに一拍停止した。

「……へっ？」

まぬけな呟きが唇からぼろりとこぼれ落ちる。

予想もしなかった台詞に動揺しつつ、回らない頭でおれは答えた。

「べ、別に。何もしてないけど」

「うそ。じゃあなんでそうやって目線そらすの？」

間髪入れず返された、強めの口調にぎくりとなる。

「授業中とか、ときどきじっとこっち見てるでしょう。それなのに、わたしが気づいたら慌ててあさってのほう向いたりして。この前なんか、わたしの顔見て吹きだしそうになってたよね」

喋っているうちに気持ちちが昂ぶってきたのか、藤崎の口調がどんどん強めのものになる。おれはというと、気づかれていたことに半分驚き、もう半分でやべえと焦っていた。

「どういうつもりかと思って文化祭準備のときに近づいたら普通に話すし。なのに目はずっとそらしてて。本当にもうわけわかんない」
返す言葉がない、とはこのことだ。言われてみればそのとおり、ここ最近のおれの言動は彼女の目にどれほどおかしく映っただろう。おれは居たたまれない気持ちになった。

「伊坂くん、わたしのこと嫌ってるのかもしれないけど、そういう態度、すごくやりにくい。顔を笑われるのも、正直言ってあんまり良い気分じゃない。いくらわたしがかわいくないからって」

「ち、違う。そんなんじゃない」

誤解だと言いたかった。自分の行動は確かに奇異に思われただろうし、そのことで彼女をいたく傷つけてしまったのだと悟ったが、そうなった原因をどう釈明すればいいのかわからない。

まさか藤崎の顔がおかめに見えたりなまはげに見えたり縁日のお面に見えたりしてるだなんて、言っても絶対信じてもらえないだろう。

「じゃあどんな理由があるの？」

ずいとおどろいてくる藤崎の顔から、たまらずおれは視線を逸らす。目を見て話すのが礼儀だというが、到底無理だ。実行した瞬間に吹き出してしまおう。そっちのほうがよっぽどマナー違反だ。

だがそんなおれの葛藤も、彼女には伝わらない。あらぬ方角に視線を動かしたおれを、藤崎が怒りを込めてじっと睨んでいるのがわかる。

じつとりと嫌な汗が背中からしみ出てくる。

どうすればいいんだ。思考が回らない。うまい方便も出てこない。きつと何を言っても弁解にしかない。

進退窮まったおれは玉碎覚悟、なかば以上やけくそで叫んだ。

「おれ、あんたの顔、正面から見られないんだ」

その言葉は、たぶん、彼女を傷つけた。

ひゅつと空気を吸い込んで、喉が鳴った。

反射的に顔を上げたおれの目に、眉根をよせた藤崎の顔が映った。ふつくらと丸みを帯びた頬、高くもなく低くもない鼻、奥二重の瞳。その下の小さなほくろ。うすい唇をわずかに開いて、今にも泣き出しそうな――かお。

真実の、藤崎の顔だった。

目の前の現実を即座に飲み込めなかった。おれはぽかんと口を開け、それ以上の言葉を失ってしまう。

藤崎は赤くなった目元をぐいとぬぐった。そして、唾然としているおれを射殺するように睨み上げ、

「よく、わかった」

押し殺した声で彼女は言った。

「正直に話してくれてどうもありがとう。――さよなら」

その一言を残し、身を翻して藤崎志帆は去った。おれはなかば自

失した状態で彼女の背中を見送りながら、告げられた言葉を頭の中で反芻していた。

サヨナラ。

あなたなんか大嫌い、そういった意味と同義の「さよなら」だ。足元の地面がぐらぐら揺れて、立っていられなくなる。おれは堪らずその場にうずくまった。揺れてるのは地面じゃなくて、おれのほう。

胸にじんわりと鈍い痛みがわいた。気持ちが悪い。吐き気がこみあげる。

「……ばかやろう」

八つ当たりのように小さく呟く。自分に対しての罵倒だった。ばかやろう。伊坂航、おまえは三国一の大バカヤロウだ。今ごろ気づくなんて遅いんだよ。

知らなかった。……おれ、いつの間にか藤崎のことが好きになってたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986x/>

みどりの神様

2011年11月23日21時55分発行